

小金井の湧水点 part 5

★⑧ 小金井の井 (谷口家の湧水)

中町4-16 (個人邸宅内のため非公開)
西之台遺跡水源地

王政復古を目指した明治初期、明治新政府は奈良朝の風土記を見習って新たに地理・風土・産物などをまとめた地誌「皇国地誌」の作成を全国に命じています。編纂事業は途中で挫折してしまいましたが、各地に残る皇国地誌の稿本は明治初期の貴重な情報源です。幸い当館には明治13年に小金井村と貫井村が作成した皇国地誌の稿本が残っています。

『小金井村誌』明治13年(1880)6月

『貫井村誌』明治13年(1880)8月

この2つの稿本には小金井と貫井の地名の由来と関連して、『小金井村誌』には「小金井の井」、『貫井村誌』には「貫井の井」と称する湧水点の記述があります。「井」は掘削した井戸ではなく、かま坂(質屋坂)の「かま」と同じく自然の湧水点を表す古語です。

～(前略)～且明治八亥年、上下小金井村ヲ合併シ更ニ小金井村ト称ス、且又本村中央ニ小金井ノ井ト称スル旧跡アリ、小流ナレトモ寒暑ノ別ナク湧出シ、其水至テ清麗ニシテ味ヒ実ニ美ナリ

『小金井村誌』

天和3年(1683)以来、上小金井村と下小金井村に分村していた小金井村は、明治8年に再びひとつの小金井村になっています。その後の明治13年に『小金井村誌』は編纂されています。上下小金井村を合併した小金井村の「中央」には、「小金井の井」と称する「旧跡」から寒暑を問わず清らかで味わいのよい水が湧き出ている。ただし小金井村と称したことと「小金井の井」との前後の脈絡は曖昧で歯切れが悪く、直接に小金井という地名の起源とは記していません。

一方、『貫井村誌』では冒頭に「本村ノ中央ニ貫井ノ井ト称スル池アリ」と述べたあと、「古蹟」の項で「貫井の井」について詳述しています。

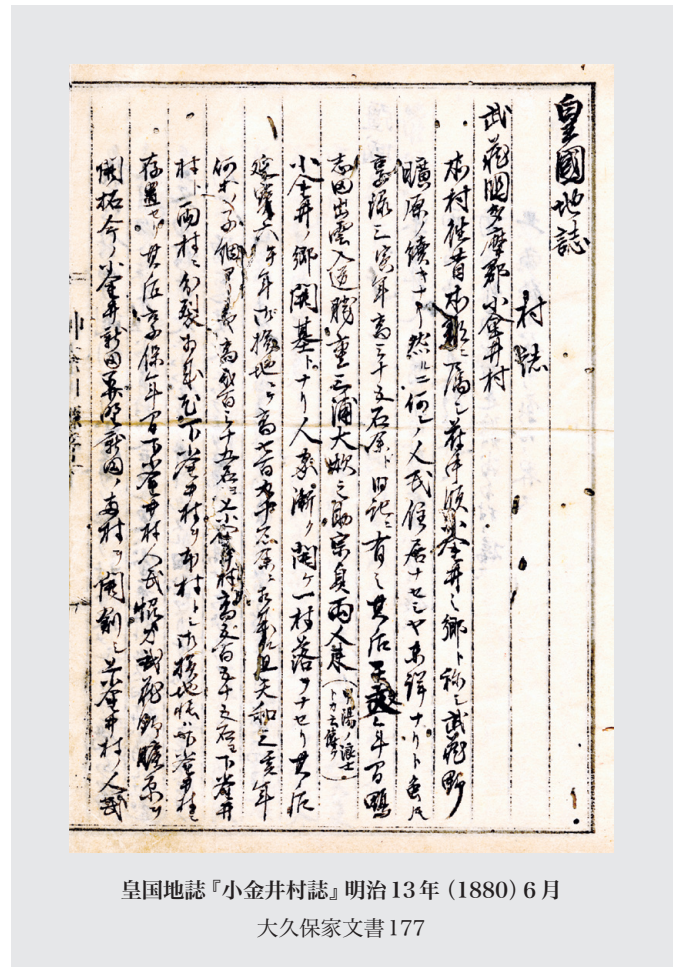
古蹟

貫井ノ井ト称ス、中央ノややみなみ稍南村社貫井神社ノ境内ニアリ、東西二十間南北十間面積二百坪深六尺、冷水湧出シテ旱天澗ルルコトナシ、此ノ井ニ因リテ村称ノ起リシモノナラント云

『貫井村誌』

「貫井の井」は貫井神社の境内にあり、東西20間・南北10間・面積200坪・深さ6尺で、冷たい水が日照りの時でも枯れることなく湧き出ている。この「貫井の井」、つまり貫井神社の湧水池が貫井の地名の由来であると実に単純明快に説明しています。

小金井村と貫井村は近世新田開発以前にすでに成立していた古村で、村の中心は小金井神社と貫井神社です。しかし小金井村は貫井村と同じく「井」の文字を冠するにもかかわらず、小金井神社に湧水はありません。



皇国地誌『小金井村誌』明治13年(1880)6月
大久保家文書177

・小金井神社

小金井村の「中央」にあるのは「小金井の井」だけではありません。『小金井村誌』には小金井神社や金蔵院を「本村ノ中央ニアリ」と記しています。加えて小金井村の役場も小金井村の「中央」にあり、小金井神社に間借りしていたことが記録されています。

本村ノ中央ニシテ仮リニ小金井神社祠掌星野甲子三郎家宅を用フ

『小金井村誌』

星野甲子三郎は小金井神社の当時の宮司です。小金井村ではこの頃、村役場の建物を建設する予算がなかったため、小金井神社境内にあった星野甲子三郎の家宅に間借りしていました。その星野甲子三郎は社頭で頒布するために、小金井神社の由緒書『小金井神社略縁起』と「参拝記念ゑはがき」を併せて製作しています。この由緒書と絵はがきは印刷物ですが、発行年の記載がありません。とはいえ『小金井神社略縁起』文中の記述から発行年を推測することができます。例えばその冒頭では、小金井神社の最寄り駅として新小金井駅を挙げています。

中央東線新宿駅より境駅に至り、多摩軽便鉄道（二哩）に乘換へ、新小金井駅に下車、是より十町にして達す

星野甲子三郎『小金井神社略縁起』

小金井最初の鉄道駅である新小金井駅が開業したのは大正6年10月22日。『小金井神社略縁起』は、それ以降に発行されたはずですが、また御祭神菅原道真公の生年である承和12年(845)を、「大正7年より1073年前」と大正7年から遡って解説しています。こうした記述から『小金井神社略縁起』と「参拝記念ゑはがき」は、大正7年(1918)に発行されたとみて間違いのないでしょう。

この大正7年以前から星野甲子三郎は、小金井神社の参拝客増加を企図して準備を進めていました。すでに大正4年には小金井神社境内の西側を「小金井神社神苑」として整備し、菅原道真公ゆかりの梅を植えています。

小金井神社神苑

大正4年 今上陛下御即位に方り氏子一同尊王敬神の微衷を表し御大典紀念として之を設く、祭神菅公の愛し給へるに因みて多く梅樹を植へたり、春風一たび到れば馥郁香を放つ

星野甲子三郎『小金井神社略縁起』

『小金井神社略縁起』に書いてあるのは、何も小金井神社のことばかりではありません。小金井という地名の始まりについて「小金井の濫觴」と題し、その元となった「小金井の井」についても述べています。

小金井の濫觴

神社より壺丁許、伝え聞く、往昔武蔵野に七井あり、井ノ頭、石神井、貫井、小金井等今に存す、井は西の台小丘の下、清水滾々として湧出し、四時湯する時なし、小金井の名茲に起ると、今は大久保氏の有たり。

星野甲子三郎『小金井神社略縁起』

少し分かりづらいので、意識して補ってみます。

小金井の濫觴（地名のはじまり）

小金井神社から一丁ばかりの所に小金井の地名の由来となった湧水がある。伝え聞くところによると、昔は武蔵野に七つの「井」があって、今は井之頭、石神井、貫井、小金井などが残っている。小金井の井は西の台小丘（現金蔵院の坂）のもとにあって、清水がこんこんと湧き出て、四季を通じて枯れることがない。小金井の地名の起源はこの湧水であり、今ここは大久保家が所有している。

『小金井村誌』では曖昧だった「小金井の井」がある場所は「西の台小丘の下」、その所有者は「大久保氏」とはっきり特定しています。この「大久保氏」とは大久保善左衛門家のこと。下小金井村の名主を務めた旧家で、代々の当主は「善左衛門」を襲名しました。『小金井村誌』はこの大久保善左衛門家に保管されていた文書です。



小金井神社略縁起

たましん地域文化財団
デジタルアーカイブ



小金井神社神苑
左の人物は星野甲子三郎

たましん地域文化財団
デジタルアーカイブ

きんせんそうろ
・金泉草露

大久保善左衛門家は代々、小金井神社西側に本宅を構えていました。「小金井の井」はそこから少し離れた金蔵院の東側にあります。一体いつから「小金井の井」がある土地が大久保善左衛門家の所有地になったのか詳らかではありませんが、明治9年の『田畑其外取調野帳』では、すでに大久保善左衛門家の「宅地」(1406番)になっています。この「宅地」は本宅とは別に当主の座を退いた隠居が住まう屋敷で、その門にはいつの頃からか「金泉草露」と揮毫した額が掲げられていました。郷土史家星野進一は大正時代に、この隠居家を目の当たりにしています。

⑤は昔、名主さんであった大久保善左衛門さん(善夫さん祖父)の隠居家であった。しゃれた門があり、戸びらの上には、「金泉草露」と書かれた額が掛けられていた。この額の字は小金井村の名前となった黄金井の泉の起源でもあったと聞く。湧き出る清水を引込んで大きな池があり、珍しい鯉や金魚が遊泳していたので、小学校のかえり道、鯉を見ようと回り道した子供が多かった。

星野進一「大正時代の中山谷風景」
小金井新聞 昭和56年7月21日

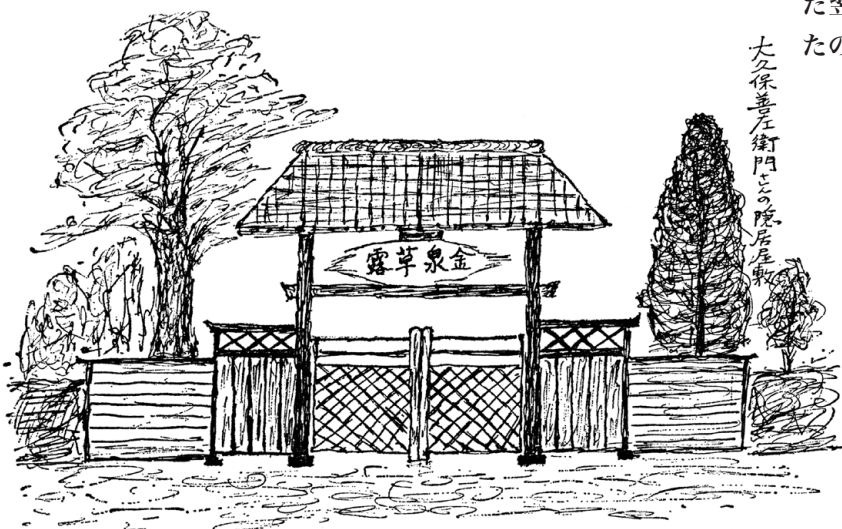
「金泉草露」は湧水がある隠居家を漢語で表現した名称で、湧水そのものは「金泉」、「草露」は「草廬」と同義で、自ら所有する隠居家をへりくだって粗末な草庵と表現したのでしょう。

一般に大久保善左衛門といえば最も有名な第13代大久保善左衛門、大久保常吉(1860～1924)を指します。これは川崎平右衛門といえは川崎定孝(1694～1767)を指すのと同様です。四男であった常吉は十代で家を出て、20年ほど文筆業・新聞記者として生計を立てていました。それが明治27年に小金井に戻り、家督を相続しています。常吉の先代は年の離れた長兄宗利(台六郎から改名)で、常吉は戸籍上では宗利の養子になっています。翌明治28年に常吉は改名願(大久保家文書183)を提出、第13代大久保善左衛門を襲名しています。

常吉は明治34年から38年にかけて小金井村の第8代村長を務め、村長退任後、大正2年に小金井桜の地元保護団体である小金井桜会を結成しています。小金井桜会は小金井桜を名勝に指定すべく国に働きかけ、その成果は大正13年の国名勝指定に結実しました。常吉は小金井桜の最寄り駅、武蔵小金井駅の開設にも尽力しましたが、大正15年の正式開業を見ずに大正13年に亡くなっています。小金井村の近代化は大久保常吉なしには語れず、今日の自治体小金井の基礎を形作った最大の功労者のひとりと言っていいでしょう。

また大久保常吉は小金井の歴代首長の中でも突出した知識人です。若き日の著作は数多あり、ガリヴァー旅行記やイソップ物語の翻訳さえ手掛けています。ただし夢遊・桜洲・桜淵・撃壤庵など、様々なペンネームを使い分けており、現在もその全貌は把握しきれいていません。隠居家を「金泉草露」と命名するにしても、土地の歴史や漢学の素養がなければ難しく、あるいは常吉によるものなのかも知れません。

常吉が小金井村の村長だった時期、小金井村役場は金蔵院に間借りしていました。常吉は自宅近くの金蔵院に通勤し、金蔵院の目と鼻の先の隠居家には第12代善左衛門を退いた兄宗利が住んでいたはずですが、この「小金井の井」があり「金泉草露」と表現された大久保善左衛門家の不動産は、大正8年(1919)に磯村貞吉に売却されています。つまり大正7年に『小金井神社略縁起』が発行された翌年には、大久保善左衛門家の所有ではなくなっていたのです。



大久保善左衛門さんの隠居屋敷 星野進一画
門には「金泉草露」の額が掲げられている

小金井新聞 昭和56年7月21日



大久保善左衛門(常吉)

・小金井桜を取り巻く3つの花圃

いそむらていきち
磯村貞吉 (1860 ~ 1929) は芝区三田四国町 (現在の港区芝) にあった三田育種場の場長で、職業は種苗商です。小金井橋の南には三田育種場の支部であるはなおかこうえん華丘香園 (別名: 三田育種場小金井支場) があり、ここは磯村別荘とも呼ばれました。磯村は小金井保桜会の名誉会員でもあり、小金井保桜会は華丘香園を以下のように紹介しています。

●華丘香園 (小金井橋以南半丁)

三田育種場主磯村氏の有にして、松杉鬱蒼其の間躑躅其他の花弁を点綴し、目下専ら事業を急ぎつゝあれば、近く一大遊園地たるを得ん。

小金井保桜会『小金井桜花案内 (近傍名勝旧蹟神社仏閣)』

大正3年4月

※ 読みやすくするため、適宜句読点を挿入した
以下、省略して『小金井桜花案内』

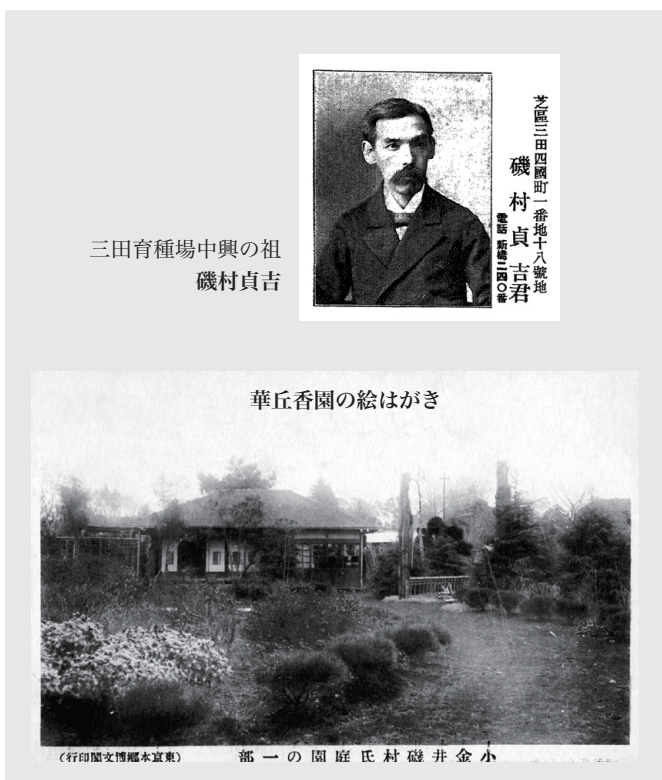
華丘香園はツツジなどを植えた「遊園地」と紹介されています。華丘香園は大正7年発行『小金井神社略縁起』にも紹介されています。

華丘香園

小金井橋より南半丁、磯村氏の経営する所、園の広袤三万余坪、四季の花弁庭園に充つ、私立遊園地の類にして人の縦覧に委す。

星野甲子三郎『小金井神社略縁起』

華丘香園は四季の花が満ちるフラワーガーデンで、一般人が観覧できる「私立遊園地」と紹介されています。



こうした小金井桜周辺の花圃は華丘香園だけではありません。戦前を代表する言論人徳富蘇峰 (1863 ~ 1957) が設立した民友社は、喜平橋の南 (現小平市) に小金井園を造成しています。蘇峰自身による小金井堤訪問記「小金井の花」を読むと、大正3年4月17日には横井小楠の一番弟子として名高い父徳富一敬 (1822 ~ 1914) と共に、それから一年後の大正4年4月17日には、今度は母親を連れて小金井園を訪れています。蘇峰は小金井保桜会の名誉会員でもあったので、さりげなく小金井保桜会の発会式についても触れています。

明十八日は日曜也。特に小金井保桜会の式日也、是晴、是雨、トし易からず。

徳富蘇峰「小金井の花」大正4年4月17日午後8時

大正4年4月18日は海岸寺 (小平市御幸町318) において小金井保桜会の発会式が執り行われた日。片や小金井保桜会でも小金井園を紹介しています。

●小金井園 (喜平橋畔)

民友社の経営する所、梅林あり花圃あり花壇あり、模様花壇にして、範を欧米の新式に則り、趣味掬すべく四時花を絶たす。猶大規模の設計中なれば、完成の上は小金井の桜花に反襯して、一異彩たるに至らんこと疑ひなきなり。

小金井保桜会『小金井桜花案内』大正3年4月

小金井園は梅を主体としたフラワーガーデンです。「四時花を絶たす」とあるのは桜の開花時期以外の集客も視野に入れてのことでしょう。この文章は星野甲子三郎も目を通してははずです。

小金井園

喜平橋畔に在り、小金井神社より二十町、民友社の経営する所、梅林あり、花圃あり、花壇あり、模範花壇にして範を欧米の新式に則り、趣味掬すべく四時花を絶たす、是亦小金井の一異彩たり。

星野甲子三郎『小金井神社略縁起』

文章は明らかに『小金井桜花案内』に似ています。大正3年に小金井保桜会が『小金井桜花案内』を発行し、それを見て星野甲子三郎が大正7年に『小金井神社略縁起』を書いたのでしょう。

小金井園を経営した民友社はどちらかというと出版社として有名で、『武蔵野』というタイトルで著者が異なる2冊の本を刊行しています。

国木田独歩『武蔵野』明治34年 (1901)

並木仙太郎『武蔵野』大正2年 (1913)

著者の国木田独歩と並木仙太郎は、どちらも民友社の社員で徳富蘇峰の部下でした。国木田独歩の『武蔵野』には、桜の開花時期を過ぎた夏の盛りに小金井堤を散歩して、掛茶屋の婆さんに笑われた自身の経験が描かれています。独歩は掛茶屋の婆さんにとっては当たり前風景であった武蔵野の雑木林に美を発見するわけですが、並木仙太郎もまた、小金井は桜だけではないと強調しています。

小金井の名は古来桜花によりて現はる。蓋小金井の桜は関東多く其比をみざる所、然れども独り桜花のみをもて小金井を論ずるは未だ誠の小金井を解せざるものなり。

並木仙太郎『武蔵野』

この並木仙太郎の『武蔵野』には「小金井の遊園」と題した章があり、「小金井の真趣味は敢て之を桜花に求むべからず」と述べ、小金井園（喜平橋梅林後方の花園）と華丘香園を紹介しています。独歩は既存の雑木林に趣きと美を見出したわけですが、並木仙太郎はさらに進んで新たに造成した花園についても言及し、観光誘致に務めています。徳富蘇峰もまた、大正6年2月25日には観桜ではなく観梅に小金井園を再訪しています。

二月廿五日、家を携へ、小金井に梅見に赴く。念の為に再言す、桜にあらず梅也。～（中略）～梅園は、国分寺駅より、小金井桜堤に通ずる、喜平橋畔にあり。

徳富蘇峰「小金井観梅」大正6年2月25日

磯村貞吉や徳富蘇峰は小金井保桜会の名誉会員でしたが、地元住民ではありません。一方、保谷新田（現 西東京市）の地元住民、平井家は現在の武蔵野大学の南に康楽園を造成しています。康楽園もまたフラワーガーデンで、梅が多く鯉が泳ぐ池では舟を浮かべて遊ぶこともできました。

●康楽園（桜橋以北三丁）

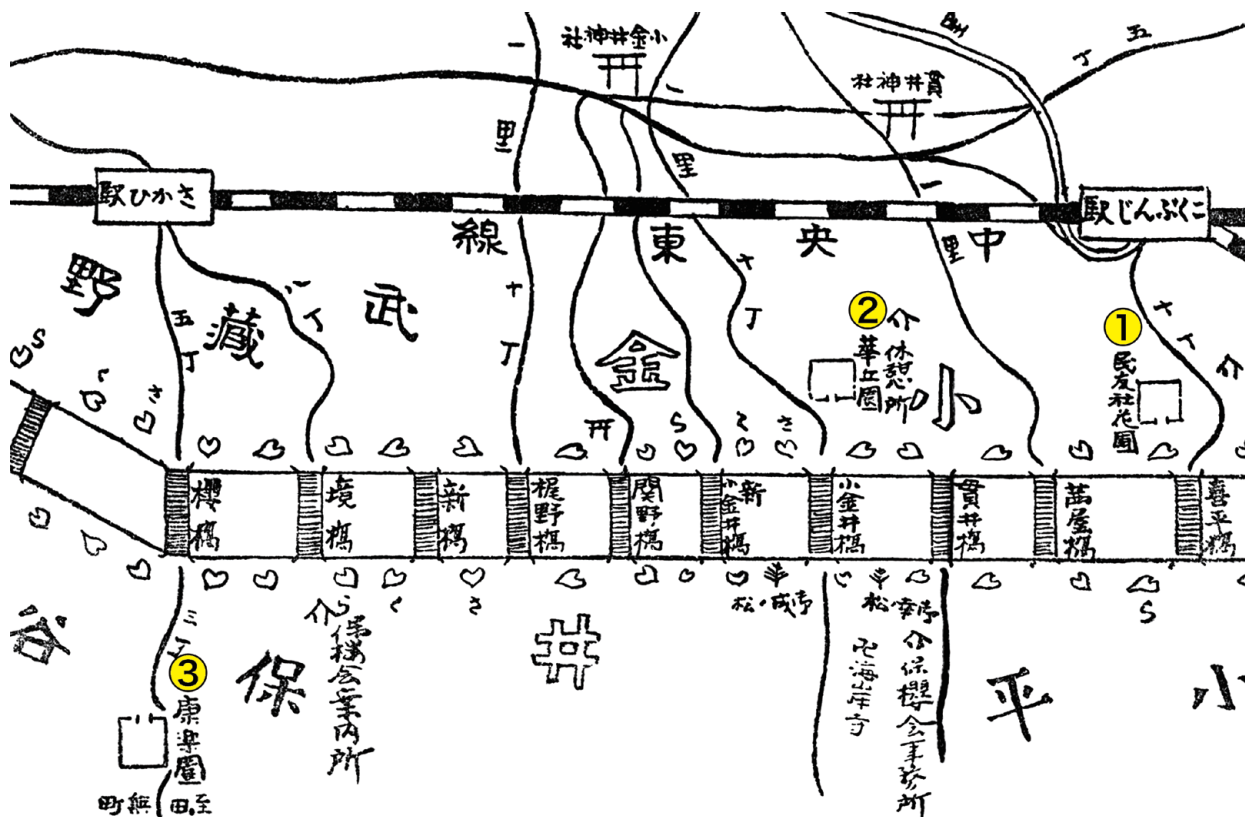
保谷新田平井氏の有たり、十数年前よりの経営にして、梅樹多く花卉に富み、既に花園の体を備ふ、池水あり軽舟を浮ぶ、鮮鯉澆刺として跳る一個の仙境なり。

小金井保桜会『小金井桜花案内』大正3年4月



康楽園 明治時代

多摩百年史研究会編『写真集 目で見る多摩の一世紀』より



小金井保桜会『小金井桜花案内（近傍名勝旧蹟神社仏閣）』大正3年（1914）4月より

南を上にした観光案内図。左上にさかひ駅（現 武蔵境駅）、右上にこくぶんじ駅（国分寺駅）。

①は喜平橋南の民友社花園（小金井園）、②は小金井橋から半丁南にある華丘園（華丘香園）、③は桜橋から三丁北にある康楽園。

さて、これら小金井桜を取り巻く花圃はなぜ造られたのでしょうか。筆者は一年を通して小金井一帯を行楽地化するために造成されたと考えています。明治22年に甲武鉄道が開通して以来、小金井桜堤は沿線を代表する行楽地でした。田山花袋が言うところの「一日の行楽」、都心から一日で日帰りできる気軽な行楽地だったのです。

ただし小金井桜には重大な弱点がありました。それは都心から花見客が押し寄せるのは、四月の花見シーズンに限られていたことです。せっかく甲武鉄道開通により大量に集客できるようになったのに、桜とは別に呼び物がなければ年間を通じて「花の小金井」とはいえない。それを見越して花圃が造成されたのではないか。大正4年に星野甲子三郎が小金井神社神苑を造成したのも、こうした動きに乗り遅れまいとする現れでしょう。貫井神社一帯もまた「貫井遊園地」と名付けて観光誘致を図っていたことは、「小金井の湧水点 part 1」で述べた通りです。

翻って大久保善左衛門家の隠居家「金泉草露」は、大正8年に磯村貞吉に売却されています。小金井桜のみに頼らない観光誘致が活性化していた時期です。小金井の地名の由来ゆかりの地は、売る側に思い入れがあって然るべき土地です。買い取った磯村にしても花圃や遊園地にするなど、なにがしかの計画があってもおかしくはありません。大久保善左衛門家と磯村貞吉にいかばかりの思いがあったのか、残念ながらその胸中を窺い知る文書は今のところ発見されていません。

磯村貞吉という人物には種苗商だけではなく、不動産開発業者という側面もあります。いずれ武蔵小金井駅が開業し人口が増加するのを見込んだ磯村は「金泉草露」の土地のみならず、小金井村各所の土地を買い集めていました。やがて過剰な土地投機が仇となり、金融恐慌のさなかに負債を抱え込んだ磯村は、「金泉草露」の土地を昭和2年(1927)に売却しています。磯村から不動産を取得したのは谷口新次郎(新治郎)。谷口は号を鴨涯(鴨崖)と名乗り、谷口鴨涯の名で知られています。



谷口鴨涯 31歳

・黄金井

たにぐちおうがい
谷口鴨涯は京都出身。現在の京都市立美術工芸高等学校で、京都画壇の優秀な指導者であった幸野楳嶺(1844～1895)に師事しています。卒業後東京に出て、明治39年10月には海外実業練習生に推薦されています。

海外実業練習生とは明治29年に始まる政府の人材育成制度で、農商務省(現在の農林水産省と経済産業省の前身)から補助金を得て海外に留学する制度です。本格的な貿易が始まって間もない日本は外貨獲得のため、海外市場の実態を多角的に調査する必要がありました。海外実業練習生はそのために派遣されたエリートです。実業のみならずその分野は広く文化芸術にまで及び、横山大観や高村光太郎も海外実業練習生の出身です。

美術工芸図案を専門分野とした谷口鴨涯が初めに渡航したのはアメリカで、明治40年から43年の間、ボストンとニューヨークに滞在しています。海外実業練習生が農商務省に提出した報告書は『農商務省商工彙報』にまとめられており、谷口鴨涯が谷口新次郎名義で明治42年に提出した4つの報告書も掲載されています。

① 染物圖案ノ見本ニ關スル説明

アメリカの染物図案についての調査報告書。

② 百合根^{ついで}ニ就テ

観賞用のユリのアメリカ輸出についての調査報告書。

③ 米國ニ於ケル各種工藝品並「テンセンツ及ヨークション、ストア」ニ就テ

アメリカの玩具市場や10セントストア・オークションについての調査報告書。「現大統領ルウヅベルト氏」の熊狩りに由来する「熊ノ手遊ビ品」としてテディベアを紹介している。

④ 米國ニ於ケル流行界ノ普及

アメリカのファッション・インテリア業界の流行事情についての調査報告書。

いずれもアメリカ市場をターゲットにしたマーケティングです。谷口の専門分野は美術工芸図案だったので、染物図案についての報告書があるのは当然ですが、10セントストアの報告書さえあります。10セントストアとは当時アメリカで流行った10セントですべての商品が買えるお店。谷口は「十仙均一商店」とも表現しており、いわば現代日本の100円ショップの源流ともいえます。農商務省が海外実業練習生を派遣した根本目的は貿易の拡大なので、谷口も専門分野を離れ農商務省の意向に沿うような報告をしなければならなかったのでしょうか。

谷口鴨涯は明治44年に今度はイタリアに渡り、トリノとローマに滞在しています。明治44年(1911)はイタリア王国建国50周年にあたり、これを記念してトリノとローマで万国博覧会が開催されました。日露戦争勝利後、

国際的地位が上昇した日本も参加を要請され、ローマにはバピリオン「日本特別館」が建設されました。明治44年3月27日に行われた日本特別館の開会式にはイタリア国王エマヌエーレ3世夫妻も臨席し、谷口鴨涯は画家石井柏亭(1882～1958)と共に、国王夫妻に「席画」を披露しています。席画とは江戸期に盛んに行われた即興画のこと。一席設けて、パトロンが与えたお題に応じて即興的に描くのですが、イタリア国王夫妻がどんなお題を出したのかは記録がありません。

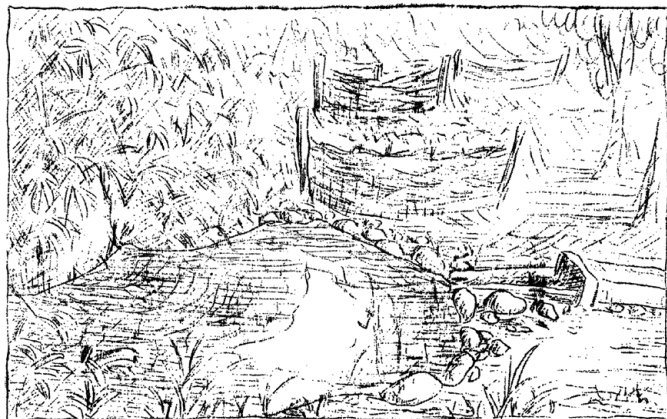
谷口鴨涯がイタリアから帰国したのは明治45年。帰国後は金融業を営んでいました。昭和2年に谷口鴨涯は磯村貞吉から金泉草露の土地を購入しましたが、自邸の湧水に積極的な関心を示した形跡はないようです。同じ移住者でも三楽荘を造成した前田武四郎(1867～1931)が貫井の地名の由来に興味を抱き、「貫井は昔し温井と書いた理由」を書いて武蔵野会の会報『武蔵野』に寄稿したのとは対照的です。

むしろ興味を寄せたのは地元小金井の学校教師で、昭和9年、小金井尋常高等小学校(現 第一小学校)の訓導(教師)たちは、郷土史教育の副読本『小金井村郷土誌』をガリ版刷りで手作りして発行しています。これは当時、小金井の歴史が地元小金井でどのように理解されていたのか、その歴史観を知るうえで貴重な史料です。『小金井市誌編纂資料 第17編』として復刻活字化されていますので、興味のある方は是非お読みください。書中、小金井の郷土史に必須のテーマ、小金井の地名の由来は谷口家の湧水をもとに解説しています。

小金井神社の西一丁字西の臺(谷口鴨涯氏邸)小丘の下、清水滾々として湧出し(一分間五石の割)四時汚濁することがない。

往昔武蔵野に七井あり、井の頭、石神井、貫井、小金井等今に存する。往時この井を中心として発達したから遂に黄金井或は金井の名が起ったのであるといふ。小金井は仮字であるう。

『小金井村郷土誌』昭和9年



井 金 黄

『小金井村郷土誌』口絵 昭和9年(1934)

谷口家の湧水は「小金井の井」から「黄金井」と表現されるようになった

文章は明らかに『小金井神社略縁起』に似ています。大正7年に星野甲子三郎が『小金井神社略縁起』を発行し、それを見て昭和9年に訓導らが『小金井村郷土誌』を書いたのでしょうか。ただし湧水量を計り、一分間に5石(約900リットル)湧出すると付け加えています。更にもうひとつ、注目すべき点は「小金井」を仮字として「黄金井」の漢字を当てていることです。これは一見些細な書き換えに思えます。しかし「黄金井」の一語で、地名の由来を黄金に値する貴重な湧水と説明できる便利な表現です。『小金井村郷土誌』の口絵には「黄金井」と題して、谷口家の湧水の素描が掲載されています。「小金井の井」より分かりやすい「黄金井」表記は、『小金井村郷土誌』の編集主任 松本太之助先生らの自信作だったのではないのでしょうか。

さて「小金井の湧水点 part 1」では、小金井の地名の由来が黄金に値する貴重な湧水であるとする説の起源が、じつぼうあんけいじゆん『遊歴雑記』であることを採り上げました。十方庵敬順は文化10年に小金井桜を見に来て、地元の古老から小金井の地名の由来を聞き取り調査しています。ただし古老が証言した小金井の地名の由来となった湧水は人見山、現在の府中市浅間山の湧水でした。

小金井と名付る事は、当処はるか南の方に人見山といふあり、此山より清潔の水湧出して、一村の人三拾戸余を養ふ～(中略)～天の扶助によりて自然と清水を得たるは、黄金を拾ひ得しに似たり、故に居村と成て小金井とは名付ぬ。

十方庵敬順『遊歴雑記』朝倉治彦 編訂

文化10年から67年後の明治13年になると、『小金井村誌』に「小金井の井」が登場します。『遊歴雑記』にある小金井の地名の由来となった湧水は、浅間山にある通称「おみたらし」の湧水。一方、「小金井の井」があるのは「本村中央」で、明らかに場所が異なります。『遊歴雑記』と『小金井村誌』の間には歴史的連続性が感じられず、「小金井の井」はどちらかという「貫井の井」と釣り合いを採って、小金井の地名の由来を分かりやすく説明するために案出されたのでしょうか。続く大正7年には『小金井神社略縁起』によって「小金井の井」がある場所が特定され、昭和9年には『小金井村郷土誌』によって「黄金井」と表記されるようになる。黄金に値する貴重な湧水が小金井村の中央にあるとするのは明治の近代化以降のことで、さほど古い話ではないことがお分かりいただけたかと思えます。

【以下、次号に続く】



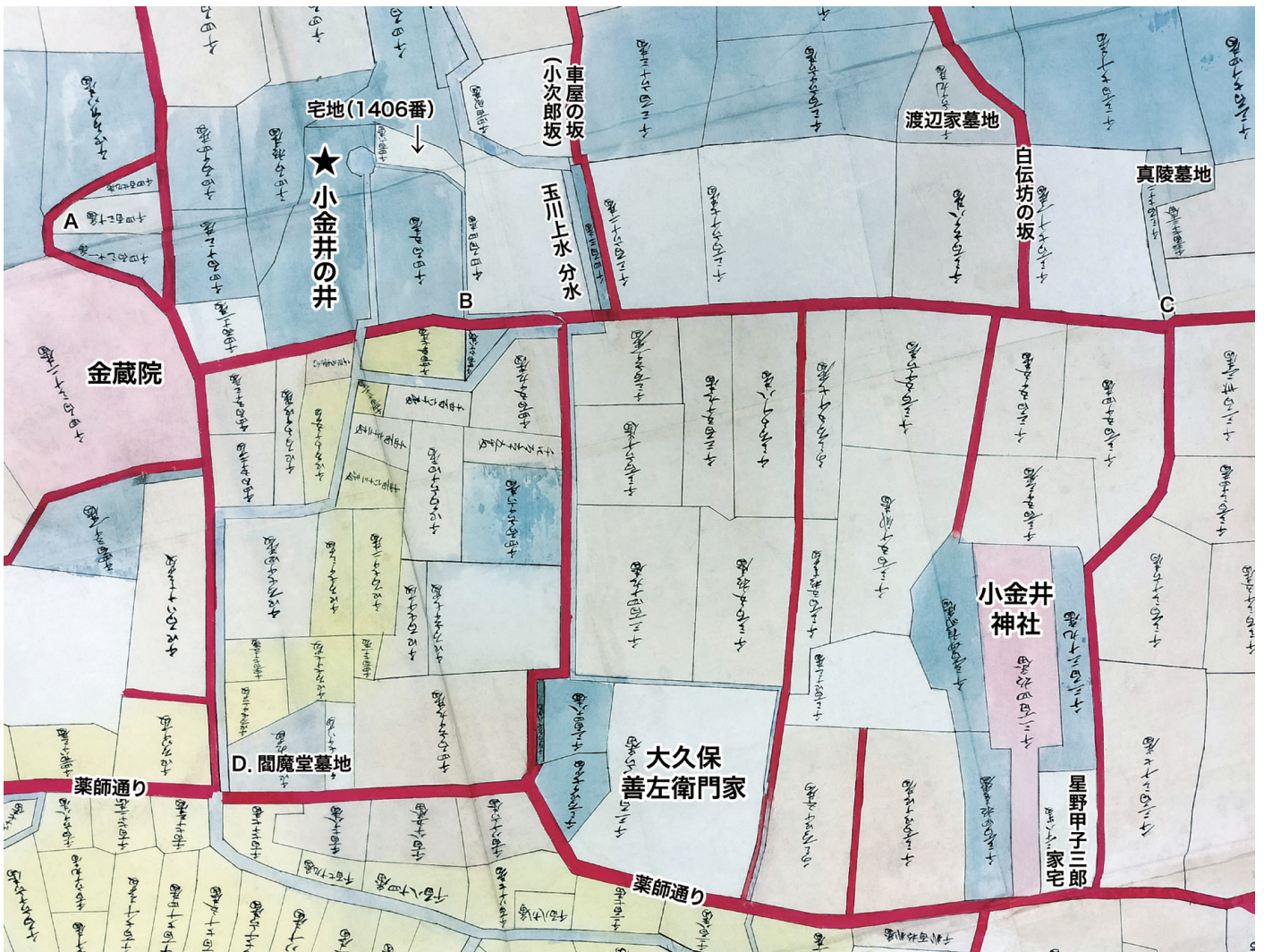
A. 金蔵院の坂から見える大久保善左衛門の墓。金蔵院の坂は戦後になって小金井街道の陸橋と接続した。



B. 「小金井の井」の流路跡



C. 第二中学校の北側にある真陵墓地。小金井神社東横の道路は白伝坊の坂ではなく、真陵墓地に接続していた。



小金井村全図 明治8年(1875)

「小金井の井」の湧水の流路は、二又に分かれて南下している。

「小金井の井」の東側には玉川上水の分水が流れていて、これは連雀通り沿いを流れていた分水から分岐した流路。

「小金井の井」の湧水と玉川上水の分水は交わりながら南下して、最終的に野川に落ちていた。

D. 閻魔堂墓地

「閻魔堂墓地」は小金井小次郎の墓がある鴨下・閻家墓地の正式名称。閻魔像を含む十王像を祀る閻魔堂があったことが、その名の由来。江戸幕府が編纂した官製地誌『新編武蔵風土記稿』にも、「三間四方ノ堂内二十王ノ木像ヲ安セリ」と記されている。

この閻魔堂墓地と、今も閻魔堂が残る貫井共同墓地(貫井南町4-19)は、同じ薬師通り沿いにある。薬師通り(村道第2号線)は、国分寺と国分寺薬師堂に向かう参詣道。小金井村の閻魔堂墓地から薬師通りを西に向かえば、貫井村の貫井共同墓地にたどり着く。つまり参詣者は小金井村と貫井村で二度、閻魔像を含む十王像を拝することができたはず。

小金井市文化財センター通信 No.6

小金井の湧水点 part 5

文/構成 多田 哲(学芸員)

令和8年3月31日発行

小金井市文化財センター

(旧 浴恩館)

小金井市緑町3-2-37

(浴恩館公園内)

☎ 042-383-1198